布教通信

西征錄（其二）

四月十九日於瑞浦　隨行員　田中塵外

鯉城

七日、瀛車廣島に着するや、嚴格なる取調を受け、後ち始めて豫定の旅館に投するを得たりき。旅館は停車場側にして、大本營を距る十餘丁。便太だ宜しからざるも、市内の旅店、概ね御用宿、若くは徵發の命を承け、混雜せるを以ての故なり。

時未た晡ならず、管長は車を僦ふて、鍋島廣島縣知事を訪はる。蓋し同縣の人。歸途、管長は又た土方宮内大臣を、其の旅館に尋ぬ。

白雨一過、連山の翠色滴、らんと欲す。夜に入り、天晴れんとして又た曇り、明日の陰晴、轉た意に關するを以て、晏起癖を得たる予も、眠竟に成らすして、拂曉衾を蹴る。

八日、午前第八時、篠衝く如き雨を侵して、管長は車を僦ひ、土方宮相を訪へり。予は馳せて大本營に赴く。蓋し明後日を以て進轉せんとする大總督府に隨ふて清地に行かんか爲なりき。先つ其事務所に到り、刺を通して横井編輯官に面話せんとを請ひしも、氏未た登營せす。營吏は予に告けて曰く、横井氏還回渡清するに就き、仕度其他の用向きにて、本日より或は登營なきも計られず。君宜しく其の宿所を訪へと。將さに門を出てんとするや、管長の來れるに遇ふ。告くるに其のことを以てし。管長は大本營なる落合軍醫正を訪ふ筈にて、予は別れて横井氏に到る。刺を出して、氏及ひ丸山正彦氏に面し、語るに來意を以てし、其の斡旋を囑す。氏等乃ち予に謂へらく、折角の御決意なれとも、最早容易に從軍の許可あるべからす、兎に角本營の方針として、非戰鬪者の從軍を許さゝるの事情なり云々とて、其筋へ紹介の刺を與へらる。予、事の甚た難きを思ひしも、素志自から禁し難く、途中筆硯を借りて、咄嗟一篇の願書を裁し、倉皇車を飛はして、大本營の門前に來れり。予は直ちに紹介せられたる副官大塚大尉に面會を請ひ、願書を出して其意を陳ふ。大尉予に說くに、到底許可し能はさるの理由を以てす。予、强請再三に及び、願書と共に、予を失望の底にまで却下せ

られたり。快々として旅館に歸來せしは、午後三時頃なりき。

九日、宿雨漸く晴る。午前九時、管長　大本營に出頭。

兩陛下の御機嫌を伺ひ奉り、行宮の御有樣を拜かみ、敵慮の程を惶み奉りて、感慨の餘、左の國風を誦せられたり。

大君はせまき假屋にすみませり
名のひろしまを御心にして

劍影旭日に閃めき、軍馬東風に嘶く。市中赤黃の帽、到る處に簇るを見る。

予は尋ねて中島(舊姓龜田)仁平氏と面す。氏は先きに本館に在り、一足生と號して、本誌創刊の當初より編輯に盡力せられしが、征清の事起りしより、身軍籍に在るを以て、徵されて近衞師團に入れり。爾後靴を拊て、出師の令下らざるを嘆じつゝありしが、今回愈々總督に隨ふて出發の命を受け、勇氣勃然として東都を發せしは、予等に先たつこと旬日。氏は明曉先發隊として、愈々當地を出發すと、予之を聞て胸中感多少。十日、天晴れ氣暖かなり。午前予は大本營內侍醫局に到り山科元行翁を訪ふ、在らす。乃ち其の旅館に行き面談數刻、依囑する所あり。歸路大坂毎日社の知友に遇ふ。曩きに予が其社に訪ふて遇はざりしの人。嘗て筆を載せて韓山清海の激戰を觀、病を獲て歸來、未た幾旬ならざるに、今回亦た軍に隨ふて戰地に向ふといふ。昨は中島氏の壯談を聞き、今ま又たこの快事を聞く、等しく是れ遠征の客、予の胸中自から一種の愁情を湧出して旅館に歸る。

十一日、晴。東都に書信す。午後管長と共に當市豫備病院を見舞たり。夜に入つて、東京及ひ仙臺に轉送すへき負傷兵士數百、停車場傍各旅店に休憩す。予等の室亦た明け渡して階上の一室に移さる。時は來れり。馬車及腕車を以て病院より送られ來る兵士、隻腕を落せるもの、双手を失へるもの、隻脚あらざるもの、腿下兩足を持たざるもの、或は杖に依り、或は負はれて入り來る。以て當時彼等が如何に君國の爲に激戰奮鬪せるかを想ふに餘あり。管長はかく咏へり、

戰して歸る負傷者のむれ見れは
世に安き身ぞはづべかりける

十二日、晴。午前予は山科翁を訪ふ。

十三日、客年大蠶東都を發せしは、實に九月十三日なりき。百万子來の臣民は、狂せるが如くにして歡送し

ぬ。是と共に吾人が忘る可からざるの日を本月本日なりとす。等しく月の十三日、廣島十万の市民感極まつて泣かんと欲するものあり。予草莽の一微臣、此の快事に會し、斯の盛擧を觀る、幸甚たしといふへし。

小松宮殿下に奉るとて、管長の和歌一首

大君のよそひとなりて榮えませ
ときはの松の千代に八千代に

午後管長と共に山科翁を訪ふ、在らす。歸來郵信數通を認む。參河神戸氏駿河伊東氏より懇篤なる書信來る。十四日、昨夜來風雨甚たしく、牖戸を叩く音急驟のことく、眠り遂にならす、萬感交々湧いて、旅情更らに忡々たりき。時辰五時を報する頃より、風收まり雨歇みぬ。乃ち起て先つ曙光を拜し、朝餐後予は山科翁の旅館に行く。翁か予の依囑に就て盡力せられしを以て、是か答禮に行けるなり。

午後愈々明日を期して朝鮮に向ふに決し、予は東京に打電せんと欲して、車を郵便局に飛はしぬ。途偶然予の親戚某に出會す。結局某の懇切なる勸告に從ひて、猶ほ二三日出發を見合はすことゝなり、某は直ちに予と共に予が客舍に來り、管長に面せり。猶ほ依囑する所ありて歸る。

此の日を以て東京本館との關係ある往復郵便電信共に濟み、淹滯せる荷物亦た到着せり。

十五日、晴。朝餐前予は鍋島本縣知事を其の邸に訪ふ。午后昨避近せし親戚某の家に行く。是れより某との往復日に幾回す。此の日管長の偶咏を得ぬ、

思ふ事まゝにならぬをならひそと
さとれはやすき浮世なりけり

十六日、春雨烟の如し。此の日午后又た負傷病兵の東京に轉送せらるゝもの百七十餘人。予等の客舍の一半、亦た休憩所に宛てられたり。各自背を撫して談話するもの、悉く當時激戰の情況ならさるなく、壯快淋漓たり。

さらゆふの包むいたではものゝふの
赤き心のまるしなりけり

これ管長か彼等をいたみ咏まれたるもの、

十七日、快晴。午后例の某來り訪ふと共に、予は又た相携へて出つ。今夜又た復た負傷者の來り慰ふもの百餘。大坂其他に移さるゝものゝよし。

十八日、東天朱の如く、遠山紫雲棚引く。朝餐未だ了らさるに、早く號外の聲を聞く。窓を押して街頭を望めは、鈴聲琳々、狂呼して號外を鬻くもの相連り、衣

嚢を物色して一錢を投するものの亦た甚た多し。予亦た一葉を得たり。予は又た朝來客舍を出て更に運動する所ありき。午后例の某來訪し、今夕草津（廣島より二里許）へ行き事の決すへきものあれは請ふ一日を延して、明旦を待てと。直ちに腕車を飛はす。

終日悶々として又た客舍に一夜の困夢を結ふ。

十九日、快晴。夏季の如し。其の運動杳として消息なし。午前十時、予は奔りて其家を訪へは、昨夜來未た歸らすといふ。乃ち意を決して某に一封の親展書を遺して、倉皇發程の行李を整ふ。

發宇品

百折撓まさるもの、以て大業を成すに足る。千挫屈せさるは、實に予か此行の當初に於て私かに誓へる所。豈一挫折の故を以て、我萬里の大志を沮喪すへけんやとは、予か自問自答の語なり。茲時四月十九日、慨然意を決して、宇品港より門司通ひの船に搭じて、西航の途に上りぬ。

鄉里を過く

午前四時、船は門司港に着せり。而して天未た明けす。暫時休憩。直ちに九鐵一番列車に乘じて佐賀に向ふ。小倉より博多に臻るの途、筥崎八幡宮を拜す。車内の乘客、皆な起て脱帽拍手懇ろに默禱せり、是れ予の大に感せしもの。平時はいざ知らす、我か皇威震動の日、此の伏敵門頭を過く、誰れかは敬神の念を起さゝるへき。敬神の念旺盛にして、愛國の情之に隨伴す。予は瀛車倉卒の際にも、乘客の拍手脱帽するを見て、我國民の敬神の念と愛國の情に富み、以て能く敵愾の氣象あるを感するなり。

亭午の頃、漸く佐賀停車場に着し、松原町中島といへる旅宿に投す。佐賀は余等の鄉里にして、管長は久濶二十年振の歸鄉なれば、今昔の感にや堪えざりけん、左の一首を咏せらる。

はたとせにあまる月日をふる鄉に
昔のともの　ありやあらずや

管長の來著せる事の翌日の『肥筑日報』に出つるや、小城町の香月則之氏來訪せらる。（軍艦八重山に乘り込みて威海衞大戰の折敵艦靖遠を轟沈せしめたる海軍大尉香月輝彦氏の實父）氏は折好く兩三日前當地に來り宿せるよしにて、大に喜はれ、夜に入つて清酌を催ほす。予は此の日、本教所屬の宮地嶽教會長渡邊繁雄氏を訪ひしも、近村布教中にてあらす。

翌四月廿二日正午、長崎通ひの瀛船出帆の報あり。直

ちに結束して人車を走らせ、二里「諸富」に至り、瀛船大川丸に乗る。室内人少なく、予等を加えて僅かに三人。海面亦た静にして、漣漪僅かに船底をたゝく。進んで島原の邊に至るや、風颯々として起り、白雨從つて之れに加はり、船員の右往左往する、囂々喧々たる、船妙らしき予は、直ちに甲板に出てゝ海上を凝視し、其の太た怖るゝに足らざるを覺り、室に入りて眠る。一睡覺め來れは東方既に白く、雨歇み風收まり、燿々たる曙光は碧波を照らして、心氣自から爽然。

瓊瑤浦

本邦舊最の開港場長崎は、人口六萬を有し、加ふるに各國の居留民を以てし、清國人のみにても、目下在留するもの八百人餘なりといふ。灣内に碇泊する大小瀛船の數亦た甚た多く、黑烟天を衝く烟筒は、林立せる桅檣と參差し、外國軍艦の嚴然投錨し居れるをも見る。予等を乗せたる瀛船、埠頭に着すると同時に、入港せる某號の甲板上韓人數百を見る。是れ今回日本に留學せんとて、派遣せられたる京城の學生なりといふ。予等か投せる福島といへる旅店に、彼等の一隊も亦た投宿したり。

此地亦た管長の嘗て永く垂跡せらるゝ所。今より二十餘年前迄は、本教の信者甚た多く、前管長花守翁亦た屢〻巡教して、不二眞神の大道を弘められしの地。而して又た道祖長谷川角行靈神は、實に此の地に生れ、此道を起し給ひしなり。八代の師三志翁、初め此に來り、實踐濟度の方法を以て、曇りなき參鏡の教を說き給ひしと聞く。而して、御代お振りの變りの事よりして、師等の足跡茲に絶え、爾後幾十年氣脈通せず、音信亦た疎にして、當時熱心に本教を奉信したりしものも、今は如何にしつゝあるか、杳として其の消息の知るへきなかりき。予等今回西行の途、此處に宿す。如何にもして此の地に布教し、先師の遺業を申ふる、亦た實に予等の一大責任なるべし。然りと雖とも、左なきだに荏苒日を消して、未た一行か其の目的地に達せざるの今日なれは、須らく歸途徐ろに教を此處に布かんと欲し、先つ旅店に就きて仁川行の定期瀛船を尋ぬるに、廿六日一隻の瀛船彼地に直航するも、そは今回荷物を滿載して行くことゝなり、其の後は來る五月一日に發すへきよしを答ふ。予等その滯在の甚た永きを思へと、また如何ともする能はす。乃ち茲に數日の淹留と決せり。

客舍雜記

鎮西大社の扁額嚴そかに立てる唐鐵の大華表を經て、幾百の石階を攀ち、幾個の石華表をくゞり、諏訪神社神殿に詣づ有名なる大社にして、四時參拜者絶ゆる事なく。登り畢つて回望すれは、遠く瓊瑤灣外に眞帆片帆を見、低く長崎市街一眸の中に落つ。酷だ東都愛宕山上に肖たり。半腹より右を長崎市公園となす。小泡噴水の狀、石碑苔蒸の躰、松柏の蓊鬱たるの景等、頗る賞すへきものあり。時明治廿八年四月廿九日、此の日を以て市内の有志は、這回名譽の旭旗長風に靡かせつ凱旋寄港せる帝國軍艦武藏、大和、の將校下士以下を此の園に請して、盛んなる歡迎會を催せり。天氣晴朗にして瑞雲靄靄、非常の盛會なりし。當市は今回を以歡迎の第五回なりといふ。また熾んなりといふべし。

留學生　予等と同宿せる韓人、皆な多少の日本語を解す、中「金重漢」と呼ふ少年あり。朝鮮工務衙門大臣金嘉鎭氏の息男なるよしにて、日夕予に親しみ、洋服を新調し、「ゴム」靴を穿ち、其結束せる頭髮は、東京に於て之を斷つべしなと戲むれ、一個可憐の風容あり、資性亦た敏俊、洒落。「金允求」と云ふものあり、一夕予等の室を訪ひ、種々の會話を試む。予亦た日本の國躰の尊嚴を說き、我日本は帝國と國民と、畏けれと天皇陛下とは、決して離るへからさるものにして、三者合躰して、克く國家を結合す、之れを以て今回日清交戰の如き、百戰百勝の偉勳を奏せりなと物語れは、彼れ終始熱心に傾聽し、頗ふる感せしものゝ如く、低頭呻吟之を久しふし、我國の王室は……と言ふに忍ひさる有樣にて、竊かに暗涙を呑めるか如かりし。而して彼れ又た曰く、我國には未た人物なし、幸に予等貴國に遊び、貴國の文明の幾分を學得し、歸つて我國を强盛ならしめさるへからす、然れとも未た予等丈にては、到底我國の目的を達する能はす、予等京城のもの、須らく京城以外の各地方より人物を募り、貴國に學ふ所あらしめさるへからす、地方には隨分人物あり、然れども撰擧の榮未た地方に及はす、此の地方の人物、一度足を海外に出たして、充分の材能を奮ふの時、即ち我國の文明となるの時なるへし、予等は唯た其先鋒たるのみ云々、其の謙遜の語、熱心に彼の不熟練なる日本語を以て迸り、適た眞理を吐く。予等其野に遺賢ありとの事に至つては、我國維新の際に聯想して、坐ろに同感を催しぬ。其他雜談時を久ふして去れり。彼等今

や既に東都に入り、孜々黽勉する所あらむ。

舊同志　着港以來、先師が引き立ての舊同志を尋ぬるも遇はず。歸朝の折、充分に布教の途を啓かんと決し、猶ほ寄り〳〵其心當りを尋ねつゝありしか、一日、加藤武延といへる人、予等か旅店に來訪されぬ。此仁の養父こそ、實に當時の實行教熱心者加藤淳太夫和行とて、屢〻關東にも上り、其名全國同氣に高かりし人にて、鳩谷醍醐の諸師に教を聽き、諸師の筆蹟幾卷を藏せり。武延氏は其女の入夫にして、當時未た弱冠、能く道を聞き居たりしも、爾後幾十年、先人多く歿し、道を說き教を語るもの失せ果て、忘るゝとにはあらねども、自然眠れる姿なりし云々と。段々の物語りに、其日午後同氏の家に臻り、尙ほ舊同志の二三來り會するあり。乃ち舊を談し、關以東本教の旺盛を語り。管長よりは此地の道祖を出し、先師の盡力ありし所なるを說き。向後一たひ舊に復し、本教の爲め、國家の爲め、熱心盡力あらむことを望むよしを懇々說話されしを以て、皆々其旨を躰し、歸朝の折は、共に布教に盡瘁すべしなと語り合ひ、猶ほ先師の筆蹟等を見る、

かざらねど誰が見てもよし不二の山　鳩谷　三志

きくよりはみるかなほよし見るよりは　醍醐　三息

共に本教の神髓を吐盡せるもの。感歎眞に今更の如し。

行ふて知れみろく世の人

嘗つて佐賀を過きて不在の爲め會するを得さりし宮比嶽教會長渡邊繁雄氏の來訪あり。種々談話の末、一層布教に盡力すへき旨を誓はる依て權大教正に補し、教務取締擔任の辭令を下附す。予等出發の時迄、彼此周旋せられ、大に好便を得たり。

卅日より陰雨濛々、羈情更らに沈み、鬱悶甚たし。一日出發の瀛船、茲にまた二日を延はし、三日午下四時、郵船會社雇瀛船潮州府號は、釜山仁川へ向け拔錨すへしと決せり。予等一行、爰に故國の天地を離るゝに當り、前途の遼遠を想望して、多少の感愴、胸宇を來往す。知らす、次報什麼なる消息を讀者の座右に供するを得るや。連日の陰雨、今や將さに晴れなんとして、天地空濛、雲烟漠々、

彙報

●朝鮮の宗教一斑

朝鮮人中には佛教を信仰する者少なからざるも大方は